

「日本音楽学会国際研究発表奨励金」受領者報告書

東日本支部 平井真希子

1. 発表学会について

今回奨励金をいただくことになった発表は、2012年11月1日から4日までの4日間にわたり、アメリカ合衆国ニューオーリンズで開催されたアメリカ音楽学会 2012 年年次大会（The American Musicological Society Annual Meeting 2012）におけるものである。この学会（以下 AMS と略す）の年次大会はホテルでかなりの数の会議場や宴会場を使って開かれるのが常であるが、今年はとくに Society for Ethnomusicology (SEM)、Society for Music Theory (SMT) を合わせた3団体合同の大会であったため、参加人数も多く、至近距離にある2つのホテル（Sheraton New Orleans 及び Astor Crowne Plaza）を使用するという大規模なものになった。ちなみに3学会のセッション数の合計は234（2学会、3学会合同セッションを含む）、各セッションは複数人のパネルもあれば2～5本の個人発表から成るものもある。AMS 所管分としては171のペーパーの発表があったが、これは647の応募から採択されたものということであった。

私自身が初めて AMS の学会に参加（見学？）したのは2003年のヒューストン大会で、アメリカ留学中のことであった。日本の学会では、私が専攻している西洋中世音楽の研究はあまり盛んではないのだが、この時は中世の分野でもかなりの数の発表があり、またレベルも高く、驚かされた。もう1つ驚いたのが、セッションを聞きに来ている人たちがお互いに顔見知りらしく、ファーストネームで呼び合っていることだった。「私もこの輪の中に入りたい」と思い、その後何回か応募してみたこともあるのだが、実力が伴わず、不採択が続いていた。今回初めて採択され、私にとっては長年の夢が実現した記念すべき学会発表だった。

実は学会期間中、職場で大きなイベントがあり、本来ならその手伝いをすべきだったが、特別に休みをいただき、学会に参加することができた。迷惑をかけたにもかかわらず早く送り出してくれた同僚や上司に感謝したい。

2. 研究発表要旨

今回私が発表したセッションは、11月2日の午前9時から行われた“Looking Back/Looking Forward: New Perspectives on Medieval Topics”というもので、中世音楽関連の個人発表4本が行われた。それぞれ発表時間が30分で質疑応答が15分というゆったりした時間設定である。司会は Mark Everist であった。有名な Margaret Bent が同じセッションで発表するということもあり、この分野の主だった研究者を多数含む多くの聴衆が集まり、盛況であった。

発表タイトルは“The Concept of *Copula* Reconsidered”で、『音楽学』第57巻1号に掲載された「コプラ概念再考」という論文を英文で書き直したものである。ご興味のある方はそちらをご参照いただきたい。要旨は以下の通りである。

ノートルダム楽派の2声オルガヌムには「テノルが持続音で対声部が自由リズムの狭義のオルガヌム」、「テノルが持続音で対声部がモードリズムのコプラ」、「両声部ともモードリズムのディスクアントゥス」という3つのリズム様式があるとされている。この解釈を初めて提示した Fritz Reckow は、ヨハネス・デ・ガルランディアの「オルガヌムには3つの種がある。ディスクアントゥス、コプラ、（狭義の）オルガヌムである」、「コプラはディスクアントゥスとオルガヌムの間にある」、「コプラではモードリズムの対声部が同音を保つテノルの上に置かれる」という記述をもとに、コプラをリズム様式の上で「狭義のオルガヌムとディスクアントゥスの中間」にあるものと考えた。しかし実際の楽譜史料では、対声部がモードリズムか否かは判別困難なことが多い。すなわち、狭義のオルガヌムの

部分とコプラの部分とを明確に区別することは難しいのである。

近い時代のガルランディア以外の理論書では、コプラの定義として「テノルが持続音、対声部がモードリズム」という内容は書かれておらず、むしろ「狭義のオルガヌムとディスクントゥスの間にあ

る」という点が重視されている。またその他の部分には、コプラとは「ディスクントゥスをより良くする」、「多くの部分（あるいは音符）からなる」、「反復進行が使われている」、「フレーズの終わりに関係する」と考えられる記述がある。さらに理論書でコプラの例としてあげられている曲の楽譜を検討すると、テノルが持続音からモードリズムに移行する部分で対声部に反復進行が使われていることがわかった。これらに基づいて、本論文では、コプラとは「狭義のオルガヌムからディスクントゥスへの移行という役割を持つ、反復進行を特徴とするような部分」を意味しているのではないか、すなわち、リズム様式の上ではなく音楽の流れの上で狭義のオルガヌムとディスクントゥスの間に置かれるものではないかという新たな解釈を提示する。

3. 質疑、反響と感想

実は、最初の反響があったのは学会発表よりはるかに前のことであつた。7月19日に発表予定者あてに「暫定プログラムができた」というメールが来た。暫定プログラムとは、発表タイトル、発表者名、日時のみを載せたものである。すると、なんとわずか数時間後に「あなたの発表に興味があるが、自分の発表と時間がかち合っていて聞きに行けないので、原稿を送ってこないか」というメールが来たのである。発信者は Jeremy Yudkin、『音楽学』所載論文を読んでいただけでわかるが、私が発表で批判している当の相手の一人である。彼とは全く面識がないので、おそらくタイトルのみから自分の研究と関係のある発表だと気づき、AMSの学会名簿で私のメールアドレスを探したのであろう。アメリカでは、研究者どうしの交流がこのスピードで、しかも面識がないからといって遠慮すること

なしに行われているのだろうか。のんびりしてはいられない、という気持ちにさせられた。

当日の発表は、ほぼ予定通りの 30 分で終わることができた。実は発表中に、おそらくパソコンの規格の問題でパワーポイントの一部のスライドの端が切れてしまうという事故があったのだが、聴衆から「そのままでわかるので、気にせず続けて」という声掛けがあり、大きな問題にはならなかった。

質疑応答の 15 分間に、6 人から質問やコメントがあった。Charles Atkinson や Margot Fassler などオルガヌムの専門家ではない中世音楽研究の権威からの質問は、まあ想定内といってよいもので、ただどしどしい英語ながら答えることができた。日本音楽学会での発表や『音楽学』投稿論文の査読の過程でご指摘いただいたことが役に立ったと言えるだろう。ところが、オルガヌムの専門家である Rebecca Baltzer の質問は全く予想していないものだった。「コプラの例としてあげられている部分の対声部は、モードリズムで解釈できるのか」という質問で、実は今回の発表内容の本質にかかわるものなのだが、日本では誰からも指摘されたことがなく、私自身気付いていなかった。正直に「そのことは考えていなかった」と答えるしかなかった。すると、やはりノートルダム楽派に詳しい Thomas Payne と司会者の Mark Everist が、スライドを見ながら私に代わってディスカッションをしてくれたのである。発表者としては恥ずかしいことだとも言えるのだが、同時に「このディスカッションを聞いただけでも、この場に来たかいがあった」という幸福感も感じていた。こうして発表は終わった。その後の休憩時間にも数人が話しかけてくれ、全般に好意的な反応だったと言えよう。

今回の発表で唯一残念だったのは、留学時代の母校 Stony Brook が学会直前にハリケーンの直撃を受け、関係者の多くが学会に来られなくなってしまったことである。楽しみにしていた恩師 Sarah Fuller 先生との再会も実現できなかった。

このようにレベルも高く、専門家の意見も聞くことのできる AMS

だが、もしかして日本人がいきなり発表するのには少しハードルが高いかもしれない。参加者のほとんどが英語のネイティブスピーカーか長く北米に住んでいる人で、どう考えてもその場で一番英語ができないのは自分、という状況はいささかしんどいからである。私の場合、AMS が不採択となっている間に、多国籍の発表者が集まる他の学会で数回英語で発表して経験を積むことができたのが、かえって良かったと思う。とくに毎年夏にヨーロッパで開かれる **Medieval-Renaissance Music Conference**（通称 **Med-Ren**）は専門分野の近い若手研究者が多く集まるので、中世ルネサンス音楽専攻の人にはおすすりである。ここで多くの顔見知りがあったことで、今回の AMS でも心理的なハードルが少し低くなったように思う。

他の分野でも探せば同じような性格の国際学会があることと思う。この「日本音楽学会国際研究発表奨励金」の制度を生かして、積極的に外国語での発表に挑戦していただきたい。

最後になりますが、助成金をご寄付くださった住友生命保険相互会社の方々に、心より感謝を申し上げます。